



Title	SFにおける超常的な語り : SFにおける回想とアイデンティティの問題について
Author(s)	占部, 歩
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 67-76
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72697">https://doi.org/10.18910/72697</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# SF における超常的な語り

## ——SF における回想とアイデンティティの問題について——

### 占部 歩

#### 1 はじめに

本論は、SF 小説に見られる「超常的な語り」の分析を通して、フィクションにおける回想とそれが語り手に付与するアイデンティティ形成という営為の性質という問題について考察する試みである。具体的にはミハイル・ブルガーコフの『犬の心臓』(Соба́чье сердце) (1925)、テッド・チャンの『あなたの人生の物語』(Story of Your Life) (1998) の二作品を取り上げ、そこに見られる未来からの回想と、人間の意識を持った犬の回想という、特殊な形式の語りの分析を行う。これらは SF というジャンル特有の「意識の変貌」という性質を備えており、本論はそれらの語りをアイデンティティ形成という観点から分析することで、SF とアイデンティティ形成という二つの領域を結びつける端緒を探ることを目指すものである。分析の方法としては、数あるアイデンティティ研究の領域の中から、フランスの哲学者ポール・リクールが提唱した「語りのアイデンティティ(narrative identity)」に立脚して論証を行う。これは自身の体験を他者に物語る際、語り手は前もって構築されたアイデンティティを即物的に提示するのではなく、むしろ語ることそのものがアイデンティティ形成の行為となっているとする考え方である。そしてこの過程は過去の体験を、現在の視点から新たに解釈するという行為を含むことから、必然的に価値判断の要素を含むことになる。リクールは以下のように定義している。

- (1) 「自己認識の自己は、『弁明』におけるソクラテスの言によれば、吟味された人生の結実である。吟味された人生とは、大部分がわれわれの文化が伝える歴史的でもあり虚構でもある物語のカタルシスの効果によって浄化され、解明された人生である。自己性はこうして、文化の作品によって教えられた自己の自己性であり、自己は文化の作品を自分自身に適用したのである」<sup>1</sup>

「吟味された人生」、そして「浄化され、解明された人生」という表現に、価値判断の要素を見て取ることが出来る。社会心理学者のエリオット・ミシュラーらは、これらをより具

<sup>1</sup> ポール・リクール (久米博訳) 『時間と物語』、新曜社、1990 年、p. 449。

体的な文脈に適用して分析し、体験を物語るという行為は、たとえそれが苦痛に満ちたものである場合においても、出来事を現在の視点から捉えなおして新たな統一性を与えることでアイデンティティ形成に寄与するというポジティブな側面を持つことを論証した。

本論では、物語性の分析においてリクールによって提示されたこの概念を、SF小説の分析に適用することで、フィクションにおけるアイデンティティの問題を多角的に考察することを目指す。

## 2 超常的な語り

具体的な分析に入る前に、本論のテーマである「超常的な語り」について具体的に説明しておく必要がある。本論でいう超常的な語りとは「意識の変貌を経験した存在による語り」のことであり、詳述すれば変貌の結果、主人公がそれまで所属していた共同体から疎外されてしまった、その体験を物語るという形式を指す。そこには根本的に異なった意識の形態への越境という、SF独自の視点に立脚した新しい語りの可能性が示されているといえる。

しかしこのような主題はこれまでの文学研究においては熱心に探究されてきたとは言いがたい。この分野における数少ない網羅的研究書『SFの変貌』(1991)の著者であるダルコ・スーヴィンはSFを「パラ文学」<sup>2</sup>と呼び、リアリズム文学に対置される副次的ジャンルであると位置付けているが、文学がポストモダニズムを含む前衛運動を経験し、トマス・ピンチオンなどSF的要素を取り入れつつ高い文学性を達成した作家が少なからず存在する現在、正統／非正統の区別に拘泥することにさほど大きな意義があるとは思われない。そこで本論では、ジャンルに囚われない作品分析の可能性を考察するために、語りの形式というテーマを選択した。

さて、議論に入る前に、SFというジャンルの定義における問題について整理しておく必要がある。元来SFとはジャンルの名付け親と目されるヒューゴー・ガーンズバックによって「科学小説」と定義されてきた<sup>3</sup>。その時点での最先端の科学知識に基づいたある種の未来予測を、SFは常に含んでいなければならないとされたのである。しかし、ファンタジーやポストモダン文学との接触によりこれらの定義は相対化され、今日ではSFは他のジャンルとの混交を経て、単なる科学小説という定義に収まるものではなくなっているといえる。

ではこの策定困難なジャンルを特徴付けるものは何だろうか。スーヴィンは「SFの本質とは異化作用であり、オールタナティブの提示である」<sup>4</sup>という見解を示し、その異化作用を「認識的洞察に基づく異化」<sup>5</sup>と定式化した。そしてその異化を外挿的なものと類似的なものに分類し、後者をより本質的なものとしたのである。このことから分かるように、ス

<sup>2</sup> ダルコ・スーヴィン (大橋洋一訳) 『SFの変貌』、国文社、1991年、p. 19。スーヴィンはパラ文学をその周縁的な性質に注目して把握していると考えられる。

<sup>3</sup> オールディス (2003)、ボトゥ (2011) 参照。SFを定義する試みは数多いが、どれも決定的とはいえないとされている。

<sup>4</sup> スーヴィン 『SFの変容』 p. 29。

<sup>5</sup> スーヴィン 『SFの変容』 p. 42。

ーヴィンの掲げる異化とは人間との共通点を基礎に置くという意味で相対的な性格のものであった。それに伴ってSFの語りも、異質性と対比された人間性に基づいて行われる分析的、批判的な性質を帯びたものとして提示されてきた。これは異質な存在に人間的考察を加え、それによって人間性を間接的に問題として提示するものであったが、そこで表象される他者はいわば「相対的な他者」であったことに注目しなければならない。すなわち、そこに表れる差異は現実との対称構造を堅持しているのである<sup>6</sup>。そこから導き出される結論は、そのような構造が示すのは差異を通じた人間性の考察というテーマであり、種族的アイデンティティという枠組みで考えれば、SF小説には広義のアイデンティティの問題が無視出来ない形で表れているということである。

しかし、超常的な語りによって描かれる作品は、これとは異なる形でアイデンティティの問題を提示しているといえる。すなわち「意識の変貌」という要因の介在である。具体的な例として、次の一節を見てみよう。

(2) I remember the scenario of your origin you'll suggest when you're twelve.

「貴女が十二の時に考える誕生の理由をもう覚えてるわ」<sup>7</sup>

これは宇宙人との接触によって彼らの意識と融合し、未来を体験出来るようになった科学者が、まだ生まれぬ娘に向かって語り掛ける一節である。過去形ではなく現在形と未来表現が用いられているわけであるが、このような時制選択は、現実的なメッセージ伝達のために用いることは本来不可能である。しかし主人公にとって彼女が述べている事態は未来において起こることであるが故に、それを語ること自体が「未来の回想」という特殊な形式を持っており、それが時制を通して表現されていると考えるべきである。娘は未だ存在していない故に、この呼び掛けに対してフィードバックを行うことは不可能である。それを知らながら語る主人公にとって、娘への呼び掛けという形式を取った語りは、メッセージの伝達よりもむしろ自身の孤独を再確認する役割を果たしている。このような語りが起こるには通常のコミュニケーションとは異なる文脈が必要となる。主人公は周囲の世界から断絶した存在であり、彼女にとって世界は絶対的な他者ということが出来る。そしてこのような状況はSFにおいてしか描けないものである。このような状況を設定するには、スーヴィンの述べた、異化が行われなければならないからである。本論ではこのような異化作用を「ラディカルな異化」と呼称し、それが主に語りの形式に影響を及ぼすことを論証したい。次節で、このラディカルな異化について詳しく論じていく。

### 3 ラディカルな異化

<sup>6</sup> スーヴィン『SFの変容』p. 29。スーヴィンはこれを「本当らしさ」と呼んでいる。

<sup>7</sup> Chiang, Ted *Story of Your Life* Tor, New York, 2002, p. 111。なお、本作品からの引用は以後本文中に (Chiang, 頁数) の形で示す。他の作品も同様。

改めて、異化という概念を今一度確認しておきたい。周知の通り、これは「見慣れたものを見慣れない形式で提示することにより受け手の認識に変化をもたらす」ものである。スーヴィンはこれを応用し、SF小説は「異化作用による認識的な洞察を中心として、それに基づいて作品が組み立てられねばならない<sup>8</sup>」と述べている。彼は「認識的」という性質について詳言するのに紙幅を費やしてはいないが、これをSFという観点から考えるために、ジャック・ボトゥが紹介するジュディス・メルルの言葉をここで引いておきたい。

- (3)「私は『思索小説』という語を用いてこの方法論について述べてみる。それは従来の科学的手法（観察、仮説、実験）を使って所与の現実の状態を検証し、それに際して、既知の事柄からなる背景に一想像上の、あるいは創意による一変化の総体を盛りこむやり方である。こうして創られた環境下における登場人物の反応や世界認識が、発明品や人物、あるいはその両者について、なにかを明かすことになる」<sup>9</sup>

ここで示唆されているのは、異化作用による新たな視点の導入である。現実の状態に加えられた変化により、どのような結果が引き起こされるかを小説の形で考察することを、メルルは「思索小説」という言葉で表現したのである。本論で取り上げる三作品における異化はすなわち意識の変貌であり、それは先に述べた存在論的な断絶を引き起こし、主人公の前に絶対的な他者を現出させる。この過程はSFというジャンルにおいてのみ可能なものであるが、スーヴィンの考える「アナログカルな<sup>10</sup>」異化には分類出来ないものであり、ラディカルな異化とでも呼ぶべきものである。

ここで、物語理論の研究者マリー＝ロール・ライアンの研究を援用することにしたい。彼女はフィクション世界を以下の三つに分類した。

物語意味領域 (Semantic domain) > 物語時空 (universe) > 物語世界 (world) <sup>11</sup>

彼女はこれを用いて具体的な作品分析を行っているわけではないが、フィクションにおける世界観を重層的に構造化し、登場人物らの認識可能領域をも取り込んだモデルとして大変に有用なものである。そこで本論ではこの構図を援用し、登場人物らの意識における存在論的断絶を検証したいと考える。

ライアンはこの図から更に物語世界を細分化し、その中の一つとして登場人物の精神世界 (private possible world) という領域を提示している。ここで重要なのは、ライアンが物

<sup>8</sup> スーヴィン 『SFの変容』 p. 59.

<sup>9</sup> ボトゥ 『SF文学』 p. 13。ボトゥは、SF文学を思索小説と同列に置いている。

<sup>10</sup> スーヴィン 『SFの変容』 p. 58

<sup>11</sup> Ryan, Marie-Laure *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory* Indiana University Press, 1991, p. 86.

語世界を物語の中の登場人物の精神的な領域をも含む、個別的、具体的なものとして定義していることであり、それによって物語世界全体を包括する時空(universe)という領域を、小説内で想定可能な全世界と定義することが可能となっていることである。デイヴィッド・ルイスらによって提唱された可能世界論をフィクション論に応用することによって、ライアンは、物語のあり得る、すなわち想定可能な展開だけでなく、予測や危惧といった、登場人物各自の精神活動の領域をも議論に組み込むことを可能としたのである。

さらに見逃してはならないのは、物語時空(narrative universes)をも包含する、更に上位の物語意味領域(domain)を、ライアンが設定していることである。これは時空へと具現化される可能性を備えた、小説の全意味作用の総体であり、この領域が最も広大かつ抽象的なものであるとされている。つまり、世界の集合が時空であるとするれば、物語の登場人物に認識、あるいは想像可能なのは同一時空に属する事象のみであると想定することが出来る。これを越えた差異、すなわち時空間レベルでの差異は、登場人物たちにとってラディカルに異質であり、理解不能な表象として現れる。これがすなわち存在論的な断絶である。

本論で取り上げる二作品の主人公は、いずれもそのような断絶を経験している。そしてこのような構造は、語りそのもの、そしてそれによって具現化されるアイデンティティの在り方に決定的な影響を与えていると考えられるのである。

#### 4 コミュニケーションの不成立

社会心理学者のエリオット・ミシュラーは冒頭で引用したリクールの考えを援用して、語るという行為は過去の体験の単に配置する行為ではなく、それらの再構成と解釈の問題であり、必然的に主観的評価がその本質をなすと述べている<sup>12</sup>。また、「語りのアイデンティティ」という概念においては、語り手は語りの場や聞き手といった要素から常に影響を受け、それらとの相互作用において自身のアイデンティティを具現化するとしている。

しかし、本論で取り上げる二つの作品においては、語り手は自身が志向する聞き手とはある種の存在論的な断絶によって隔てられており、それによって語りの形式がSFというジャンルにのみ可能な形で規定されているのである。そしてそれはこの場合、コミュニケーションの不成立という形式を取ることになる。

今回取り上げる二作品において、主人公たちは他者との断絶を経験している。これは意識の変貌によってもたらされたものであり、それによってコミュニケーションは、絶対的に不可能なものとして表象されている。コミュニケーションは意思疎通と訳されることからわかるように相手からのフィードバックを本質的な条件として持っている。しかし上で述べたように、作品中では主人公たちは存在論的な断絶によってそれを奪われているのであり、作品におけるコミュニケーションは失敗を運命づけられているといえる。したがって彼

---

<sup>12</sup> Elliot. G. Mishler, "Narrative and identity: the double arrow of time" Anna De Fina, Deborah Shiffrin, and Michael Bamberg, eds. *Discourse and Identity* (Cambridge University Press, 2006) p.31.

らは「語りのアイデンティティ」形成の、「聞き手の存在」という重要な要素を欠いていることになる。もちろんこの欠落自体は、手記や映像、録音などの記録媒体に向かって語るという形で現実世界でも見られるものである。しかし、作品中に見られる意識の変貌とその自覚が、語り手のアイデンティティに決定的な影響を与えている。その意味でこれらの作品における主人公たちの孤独とそれを表わす語りは、現実のそれとは範疇的に異なる絶対的な断絶を前提としているといえるのである。

それではその絶対的な断絶は具体的にどのように表現されているのか。本論で取り上げる作品においては、それは「特殊な回想」という形式に表れているといえる。本論で取り上げる作品で語り手として登場するのは、いずれも現実には不可能な体験を経た存在であり、その体験が現実性を欠いている分だけ、彼らの経験する断絶も深いものとなり、それによって痛感される孤独の意識が、語りの枠組みを決定している。これは先に引用した例に現れている通りである。ライアンは「コミュニケーションは、同じ世界に属する成員の間にしか生じ得ない<sup>13</sup>」と述べた。これを前節の図式に当てはめて考えれば、作品内でコミュニケーションがたとえある程度でも成立している時、そこでは少なくとも時空の共有が行われているということが出来る。しかるにラディカルな異化を経た場合は時空レベルでの断絶が起きているのであり、それこそが主人公たちの価値判断に大きな影響を与えることになる。しかしここで重要なのは、コミュニケーションが完全に否定されてはいないということである。世界ではなく時空間における断絶は単に感じ取られるだけでなく、コミュニケーションの試みを通して痛感されるべきものなのである。徹頭徹尾理解不能であり、いたずらに主人公を圧迫する物語世界レベルの断絶ではなく、主人公の立場から能動的に行われるコミュニケーションの試みとその失敗によって主人公が抱く「分かり合えない」という感覚こそが断絶なのである。そのような断絶を扱う作品は、必然的に特殊な語りの形式を要請することになる。それは「彼岸からの回想」という特殊な形式である。

## 5 彼岸からの回想

ラディカルな異化とは、ライアンの整理に従えば時空間レベルの断絶を引き起こすものであった。それを経験した主人公は、自身の在り方がこれまでとは根本的に違ってしまったことを克明に認識している。それは断絶が明確に意識されているという、見逃してはならない特徴がこの語りの形式には備わっていることを意味している。すなわちカフカの作品で示されるような不条理な形ではなく、その原因から結果までが明白な、客観的な形で断絶が示されるということである。主人公と周囲の世界の間には、不条理性の不透明なものではなく、透明でありながら絶対に越えることの出来ない、不可視の壁のような断絶が広がっており、主人公はそれを明確に認識している。彼らにあって断絶は困惑や絶望ではなく、諦念の感情を喚起するものなのである。壁が透明であるからこそ、周囲の世界から疎外されているという事実は否みがたく主人公たちに浸透し、彼らの精神を静的な状態に置くことになる。

---

<sup>13</sup> Ryan *Possible Worlds* p. 81.

コミュニケーションの絶対的な不可能性が、彼らを目の前の現実から引き離し、諦念のうちに自身の立場を客観的に振り返ることを促すのである。これらの要素が作品を規定している故に、主人公たちの語りは回想の形式を取るようになるのである。

先に述べた通り、回想という語りの形式には常に価値判断という要素が関わってくるが、重要なのはこれらの回想に伴う価値判断は、自身の境遇を嘆くものであるどころか、反対にそれを肯定する性質を備えていることである。カフカの作品の多くが世界から拒絶される絶望感に彩られているのに対し、この二作品の主人公たちは断絶を経験し、彼岸へと追いやられながら、実のところ現状をある意味で肯定的に評価しているのである。具体的に検証してみよう。

(4) Высшее существо, важный песий благотворитель сидел в кресле, а пес Шарик, привалившись, лежал на ковре у кожаного дивана. (Булгаков, р. 231)

「崇高なる存在、大事な犬のお恵み様は十字架に座っていて、犬ころのシャリクは身体を伸ばして、革張りソファのそばで絨毯の上に伏せていた」

これは犬に人間の脳を移植し、動物を理性的な存在へと改造するという実験が失敗に終わり、再び手術を受けて、ただの犬に戻った主人公が、部屋で横たわっている場面である。

(5) От мартовского тумана пес по утрам страдал головными болями, которые мучили его кольцом по головному шву. Но от тепла к вечеру они проходили. И сейчас легчало, легчало и мысли в голове у пса текли складные и теплые. (Булгаков, стр. 231)

「霧のせいで犬ころは朝のうち恐ろしく辛い思いをかこったわけだが、夜になる頃には温くなったおかげで、その傷口の縫い目の輪っかで苛んでいた痛みは消えてしまった。ずっと楽に、楽になって、犬ころの頭に浮かぶのは、切れ切れの温い考えくらいであった」

先の描写に続くこの一節は、主人公の肉体的な苦痛が消え去り、楽な気持になって自身の身に起きた出来事を振り返ることが出来るようになったことを示している。一つにはそれが理由であろうが、主人公である犬は事態を肯定的に捉え始めている。手術を受けて人間の言葉を操れるようになったことで、彼は社会主義思想を自身に教育しようとする周囲との軋轢など、様々な騒動に巻き込まれることとなった。それを踏まえて考えれば、多くの苦痛を味わった主人公の語りは、ネガティブな色彩を帯びたものとなっても不思議ではないわけであるが、後に続く独白は、それとは異なった視点を示している。

(6) (...) просто неопишимо свезло. Утвердился я в этой квартире. Окончательно уверен я, что в моем происхождении нечисто. (Булгаков, р.231)

「(..)まあ言いようもないくらい上手くいったってことさ。この部屋に落ち着いたってわけだ。とうとう納得いったよ、俺って生まれながらに薄汚れてるってな」

皮肉めいた言い回しであるものの、主人公は部屋をあてがわれた自身の境遇を肯定的に捉えていると考えることが出来る。そこで彼はその境遇を温かな空気の中で再解釈し、「生まれながらに薄汚れている」という、一つの確固たる形式を与えている。それは客観的に見ればあまり好意的なものではないが、その前に述べられている「上手くいった」という表現を踏まえて考えれば、少なくとも彼にとっては、この評価は決して軽んずるべきではない一つの価値を持っていると考えることが出来る。すなわち、逆説的な形ではあるが、彼は自身の体験を物語ることによって一つのアイデンティティを確立したといえ、意識的にであれ無意識的にであれ、彼の語り自体がアイデンティティ形成の作用を持っていると考えることが出来るのである。

『Story of Your Life』においても同様の事象を見る事が出来る。この作品は既に述べた通り、異星人の言語を学ぶことにより未来を把握する能力を得た科学者の語りという形式で書かれている。現在から未来を回想するという語りの構成を持つために、必然的に価値判断も特殊なものとなる。この作品における語りの最も重要な特徴として、主人公は未だ産まれぬ自身の娘の死を知ってしまうという悲劇を体験しているという事実を挙げることが出来る。これは彼女の語り、いわば絶望を運命づけられていることを示しているわけであり、それゆえに語りそのものが不可避的にネガティブなものとなることを予想させるものであるが、実のところ彼女の姿勢はそれとは大きく異なるものである。

(7) “From the beginning I knew my destination, and I chose my route accordingly. But am I working toward an extreme of joy, or pain? Will I achieve a minimum, or a maximum?” (Chiang, p. 172)

「私には最初からどこへ向かうのか分かっていし、そのために必要とされる道筋を選んできた。しかし行く先は無上の喜びなのか、それとも苦痛なのか？ 手に入る結果は最大のものか、それとも最小なものか？」

上述のような前提に立てば、「喜び」や「最大の成果」といった選択肢が語りの中に現れること自体が、ある意味奇異な事態であるといえる。しかし、この一節に続く主人公の独白にも、同様な事象が現れている。

(8) “Working with the heptapods changed my life. I met your father and learned Heptapod B, both of which make it possible for me to know you now, here on the patio in the moonlight. Eventually, many years from now, I’ll be without your father, without you.” (Chiang, p. 172)

「ヘプタポッド（異星人）との仕事は、私の人生を変えてしまった。貴女のお父さんに出会って、ヘプタポッド語 B を学んで、その両方が月明かりに照らされたパティオに今ここで立っている私を、貴女に引き合わせてくれている。結局は、これからずっと先には、お父さんも、貴女も私にはいなくなってしまうのよね」

未来を知ることとはそこで起こる不幸をも知ってしまうことであるという事実が、彼女を苦しめている。しかし、上の引用からは、娘の誕生、そして彼女と送る人生までも否定することはなく、「私を貴女に引き合わせる」という、むしろ肯定的な表現を用いていることに注目する必要がある。このことから、主人公は未来を知りつつも、それを否定したり忌避するのではなく、ある意味で肯定的に捉えている様子がうかがえ、主人公が強い諦念を感じながらも自身の決断については一定の信念を持っていることが読み取れる。これらのことから、この作品における回想の語りは、『Собачье сердце』の場合と同様に肯定的な性質を持つといえるだろう。

以上の分析から明らかになったことは、たとえ悲劇的な体験を物語る回想であっても、その過程で体験が再解釈され、その結果として自身を新たな形で定義することが可能になるという事実であり、それは SF というジャンルに特有の、現実には起こり得ないレベルでの断絶の経験においてもいえることであるという事実である。これは一つにはアイデンティティという概念の柔軟性を示すものであり、また一つにはこれまで大きく取り上げられることのなかった SF における語りという研究領域への、アイデンティティという観点からのアプローチを示すものでもある。このアプローチは、このジャンルの作品の少なからぬ割合が一人称の語りの形式で書かれている事実を勘案すれば、決して無視出来ない可能性を持っているといえるだろう。

## 6 おわりに

本論では彼岸からの回想という観点から、SF における語りと、アイデンティティの在り方について考察した。そしてその基盤として存在論的断絶を挙げ、マリー＝ロール・ライアンのフィクション世界の分類を援用して具体的な作品分析を行った。その結果明らかになったことは、そのような断絶を描く SF 作品においては、明確な断絶の認識とそれを肯定的に捉えようとする主人公の意識的な努力が、アイデンティティの形式を決定づけているという事実であった。SF というジャンルは、非現実的な状況における回想とアイデンティティの問題という独自の主題を持つ。そしてこのような主題が構想され、作品として具現化されたのも SF という伝統が蓄積され、漸進してきた成果であるといえる。

SF とは常にある種の思考実験である。本論で述べてきたように、SF は現実には起こり得ない存在論的な断絶、それに伴う「絶対的な他者」という他のジャンルにはほとんど見られない図式を提示する作用があるといえる。今回考察した二つの作品では、そのような他者に対する自身の、まるで彼岸に置かれたような寄る辺ない立ち位置の痛感が、語り手のアイ

デンティティに決定的な影響を与えていることが示された。そのように考えれば、これらの作品における思考実験とは、アイデンティティの非現実的な状況における在り方の実験であるともいえるのである。

そしてそのような形で SF における語りのアイデンティティの在り方を分析することを通して、新たな研究領域が明らかになったといえる。自身の立場を捉える、すなわち定義するという営みは、アイデンティティの確立という問題を提起する。本論は絶対的な断絶を経験した主人公の回想という、非常に限定的な条件の下ではあるが、SF とアイデンティティという、元来関連するものとしてあまり扱われてこなかった研究領域を結びつける可能性を、あるいは示すことが出来たのではないかと考える。本稿が微力至極ながらもそのような研究が発展する可能性への一助となれば幸甚である。

#### 引用文献

Блугаков, Михаил Афанасьевич Собачье сердце Художественная литература, М., 1988.

Chiang, Ted *Story of Your Life* Tor, New York, 2002.

#### 参考文献

大浦康介編著『フィクション論への誘い —文学・歴史・遊び・人間—』世界思想社、2013年。

清塚邦彦『フィクションの哲学』勁草書房、2009年。

坂部恵『語り』筑摩書房、2008年。

ブライアン・オールディス、デイヴィッド・ウィングローヴ（浅倉久志訳）『一兆年の宴』東京創元社、1992年。

ダルコ・スーヴィン（大橋洋一訳）『SFの変容』国文社、1991年。

ケーテ・ハンブルガー（植和田光晴訳）『文学の論理』松籟社、1986年。

ジャック・ボトゥ（新島進訳）『SF文学』白水社、2011年。

ポール・リクール（久米博訳）『時間と物語Ⅲ』新曜社、1990年。

Marie-Laure Ryan *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory*. Indiana University Press, 1991.

Anna De Fina, Deborah Shiffrin, and Michael Bamberg *Discourse and Identity*. Cambridge University Press, 2006.